

世界の視点

研究代表者 栗原 隆

1. 分担者

城戸 淳
宮崎 裕助
深澤 助雄

2. 協力者・所属

小林 裕明（現代社会文化研究科）
平川 愛（現代社会文化研究科）

3. 2008年度の研究活動の概要

2008年10月11日(土)15時00分～19時30分、大阪大学待兼山会館1F 特別室にて開催された、「トラウマとしてのスピノザ——近現代哲学の影響作用史的共同研究：第1回ワークショップ」に招聘された栗原隆が、「受容と変容——実体が主語だと見做される理路を経てこそ、実体が主体になる現場」を要約して発表した。

2008年11月14日(金)、18時30分から20時00分にかけて、総合教育研究棟F棟5階「人間学PS」にて、「ヘーゲル・アーベント」を開催。栗原隆が「体系を支えるもの」を、東京大学特任講師・西山雄二氏が「20世紀フランス思想とヘーゲル受容」を、それぞれ発表した。

2008年11月29日(土)14時00分～17時00分、大阪大学待兼山会館1F 特別室にて開催された、「トラウマとしてのスピノザ——近現代哲学の影響作用史的共同研究：第2回ワークショップ」に招聘された栗原隆が、「受容と変容——実体が主語だと見做される理路を経てこそ、実体が主体になる現場（増補版）」を発表、討議を行ってきた。

2009年3月3日から5日にかけて、駒澤大学で開催された、日本ヘーゲル学会主催の国際シンポジウム、「ヘーゲルの体系の見直し」において、栗原は、《Die auf der Vorstellung oder einem Paar Elephanten gestützte Welt und das System der Philosophie》を、そして、『知のトポス』Nr.4に収載された、シュルツェの『エーネジデムス』の翻訳作業に参加した、東北大学大学院文学研究科博士課程の阿部ふく子氏は、《Die Bedeutung des Systems als Lernen < der Philosophie : Zum Verhältnis zwischen der Hegelschen Erziehungsanschauung und seiner philosophischen Enzyklopädie》を、それぞれに発表した。

そのシンポジウムの提題者の一人、ケルン大学のクリスティーナ・エンゲルハルト氏と、日本ヘーゲル学会の代表理事である、駒澤大学の久保陽一教授を招いて、2009年3月7日に、新潟大学駅南キャンパス「CLLIC」で開催されたシンポジウム、「生の矛盾は解消されるのか」において、『知のトポス』Nr.4に収載された、シュルツェの『エーネジデムス』の翻訳作業に参加した、新潟大学大学院現代社会文化研究科修士課程の平川愛氏は、修士論文の精髓部分を、「マイモンの『規定可能性の原理』とカントの『汎通的規定の原理』」として書き改め、ドイツ語を交えて発表した。

4. 2008年度の研究成果の概要

『知のトポス』Nr.4に結実した「世界の視点」プロジェクトの研究成果は、スピノザの実体形而上学が、いかにしてドイツ観念論になって、主体の形而上学へと変容したかということをめぐる、多面的な考察が行なわれた。栗原は、ヘーゲルの、「実体は主語である」というテーゼを遡及することを通して、実体が主体となる理路を明らかにしようとした。平川愛氏は、マイモン哲学の原理である「規定可能性の原理」が、カント哲学の「汎通的規定の原理」から転写されたものであることを解明した。

5. 2008年度の研究成果の一覧

論文

栗原 隆、単著「精神と世界——歴史的世界を創建する神話としての超越論

的観念論」(『ヘーゲル哲学研究』Vol.14, こぶし書房, 71~85頁) 2008年12月15日

栗原 隆, 単著「『新しい神話』とは超越論的観念論のことではなかったのか」(『ヘーゲル哲学研究』Vol.14, こぶし書房, 175~176頁) 2008年12月15日

栗原 隆, 単著「『ヘーゲル事典』のクロノロジーの改訂の試みについて」(『ヘーゲル哲学研究』Vol.14, こぶし書房, 182~195頁) 2008年12月15日

栗原 隆, 単著「書評:木岡伸夫著『風景の論理——沈黙から語りへ』」(『日本の哲学』第9号, 昭和堂, 125~133頁) 2008年12月25日

深澤助雄, 単著「意味の発生」(『知のトポス』Nr.4, 117~140頁) 2009年3月27日

深澤助雄, 単著「ヘルダー『言語起源論』とカッシーラー」(『知のトポス』Nr.4, 141~162頁) 2009年3月27日

著書

宮崎裕助, 単著『判断と崇高——カント哲学のポリティクス』(知泉書館, 328頁) 2009年3月27日

栗原 隆, 編著『人文学の生れるところ』(東北大学出版会, 全359頁) 2009年3月27日

このうち,

栗原隆は, 「人間学——私たちの身体は自分のものか?」(7~30頁), 並びに「倫理学——私たちは, 本当のことを語らなければならないのか?」(21~241頁)を単独で執筆。

城戸淳は, 「哲学——観念論とはなんだったのか?」(31~49頁)を単独で執筆した。

翻訳

栗原隆・平川愛・阿部ふく子, 共訳:G・E・シュルツェ『エーネジデムス』(『知のトポス』Nr.4, 1~78頁) 2009年3月27日(なお, 栗原による解題が(77~78頁)を含む。)

付記

栗原が、駒澤大学での国際シンポジウムで発表した、《Die auf der Vorstellung oder einem Paar Elephanten gestützte Welt und das System der Philosophie》は、他の発表者の論考とともに、ドイツのFink社から刊行されることが決まった。